

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## A compound predicate nacati slati sja in medieval Russian chronicles

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/464">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/464</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 中世ロシア年代記における合成述語表現 начати слати сяについて\*

岡 本 崇 男

## 1. はじめに

本論文は、中世ロシア年代記における定形表現を手がかりとして、年代記テキストの言語的特質を解明する試みの一環をなしている。そこで、先ず定形表現の位置付けをしておかなければならぬ。

年代記は、11世紀から18世紀まで東スラヴ世界における公式の歴史記録としての地位を保っていた。現存する年代記テキストは、すべて14世紀以降に書写されたものだといわれている。しかし、写本が後世の人々によって再度書き写され、さらに複数の写本をもとにして歴史記録を新たに編集する事業が繰り返された。このため、年代記テキストは、宗教文献や法律文献など他のジャンルの文献資料よりも量的に恵まれており、中世東スラヴの書き言葉を研究するための最も重要な資料なのである。

しかし、この書写による再生産という保存法は、言語資料として取り扱う際の困難さを生み出す原因ともなっている。「(テキストの) 古い部分と新しい部分を区別するのが難しい」、「複数の著者によって書かれたものなので、文体に統一性がない」、「毎年に記事を書くスタイルは物語りのスタイルに比べて言語表現が単調である」、「キエフ、ノヴゴロド、ガリチの年代記には、互いにはっきりとした違いがあるのだが、それは方言の相違ではなく、流儀の違いである」という Issatchenko (1980: 120) の指摘は、中世ロシア年

\* 本論文は文部科学省科学研究費補助金による成果の一つである（基盤研究（B）、「ロシア諸年代記の正本と異本のPC利用による比較対象研究とその応用」、平成20年度～22年度、課題番号：20320050、研究代表者：名古屋学院大学教授・中條直樹）。

代記の特徴をよく表している。年代記テキストは、本来書かれた時代と地域が異なる複数の原資料が張り合わされて成立したものであると言えるのだが、それが別の時代に、別の地域で更に書写されたり、再編纂の資料として利用されたりすると、結果的に中世東スラヴ語の複雑なモザイクが出来上がることになる。このため、テキストに見られる任意の言語現象がいつの時代のものであるのか、あるいはどこの地域に特有のものであるのかを、年代記が成立した時代や地域と直接結びつけて考えることができないのである。

このため何らかの言語現象について疑問が生ずると、複数の年代記における実例を比較して、それらに見られる共通点と相違点を見つける作業を行わなければならない。筆者はかつて人名 Гюрги をめぐる正書法について、こうした作業を行い、表記の時間的な変遷と地域的変種について一定の結論を得ることができた（岡本2008）。人名は固有名詞であるので、それがどのように表記されても、特定の洗礼名のバリエーションであるという保証がある限り、つねに内容の本質が不变であるので、表記という表面的な変化も捉えやすいのである。

一般的に、年代記の言語の変化は、先に述べた年代記の再生産の方法の影響を受けて、極めて緩やかなものとなっている。古い要素が繰り返し継承されるからである。年代記の言語の表現が単調であるといわれるのは、こうした古い要素が定形表現となって保存され続けたことにも原因がある。しかし、記録の対象となる時代と地域は、どの年代記でも同じだということではない。この「ずれ」の部分にそれぞれの年代記の特質が潜んでいることが期待される。そして、同じ定形表現であっても、複数の年代記で重複する部分、つまり共通の原資料にもとづく記述部分、あるいは特定の年代記の記述を継承したことが認められる箇所に置かれている場合と、「ずれ」の部分にある場合とでは、それが持っているテキスト中における意味合いも違ってくる可能性がある。

なお、本論文において資料とし使用する年代記は、『ノヴゴロド第1年代

記・古輯』(14世紀後半),『ノヴゴロド第1年代記・新輯』(15世紀中頃),『ラヴレンチ一年代記』(1377年一本論文では前半部を『原初年代記』,後半部を『スーズダリ年代記』と呼ぶ),『ノヴゴロド第4年代記』(15世紀後半),『ソフィア第1年代記』(15世紀後半),『プスコフ諸年代記』(15世紀後半)である。それぞれの年代記とテキストコンコーダンスにかんする書誌情報は文末に一覧表をあげておく。

## 2. 合成述語「*начати + слати ся*」が提起する問題

*начати* の変化形と不定詞 *слати ся* によって作られる合成述語は、「使者を送って話し合いを始める」という意味で使われている。以下に、年代記テキストにおける実例をいくつか示しておく。

[1] В се же лѣто. сѣдшии Всевододу Кіевѣ. и тогда *нача слати ся* къ Володимеричемъ. и ко Мъстиславичу. хотя мира с ним и вябяше князя Изяслава Мъстислава (Мъстиславича) изъ Володимеря.  
(『イパーチ一年代記』1140年, 112v) 「この年、フセヴォロドがキエフ公であった時のこと。彼はヴラヂーミルの息子達およびムスチラフの息子に使者を送って話し合いを始めた。彼（ムスチスラフの息子）と和を結び、ムスチスラフの息子イジャスラフをヴラヂーミリから招こうとしたのであった」

[2] Том же лѣтѣ иде Рогъволодъ Борисовичъ от Святослава от Ольговича... искать собѣ волости... и приѣхавъ къ Случьеску. и *нача слати ся* ко Дрьючаномъ. Дрьючане же ради быша ему и приѣздяче к нему вябяхут и к собѣ. (同1159年, 177) 「同じ年、ボリスの息子イジャスラフは、自分の領地を求めてオレグの息子スヴァトスラフの所を出た。そしてスルツクの近くまでやって来て、ドリュツクの人々に使いを送って話し合いを始めた。一方、ドリュツクの人々は彼が来たのを喜んで、彼の元にやって来て、彼を自分たちの所へ招こうとするので

あった」

[3] В том же лѣтѣ выбѣже княгини изъ Галича въ Ляхи. сыномъ с Володимиромъ. и Ксентинъ Сѣрославичъ и мнози боярѣ с нею быша тамо 8 месѧции. и начаша ся слати к ней Святополкъ и ина дружина. вабяче ю опять... (同1173年, 201) 「同じ年のこと。ガリチから公妃がリヤビ（＝ポーランド）に息子のヴラヂーミルを連れて逃げ出した。セロスラフの息子コスチャンチンと多数の大貴族も彼女とともに当地に8ヶ月間いた。そこでスヴァトポルクと何人かの従士たちは彼女のものとに使者を送って話し合いを始め、彼女を再び招こうとした」

[4] а сам приде к Новугороду и не успѣвъ ничто же. и нача слати ся мира прося. (『スーズダリ年代記』1152年, 113v) 「一方、自分はノヴゴロドの近くまでやって来たのだが、何もできず、使者を送って話し合いを始め、和平を求めた」

[5] Ростиславъ же видѣвъ множество Половецъ убоя ся. начатъ слати ся къ Изяславу мира прося. (同1154年, 114v) 「ロスチスラフは大勢のポーロヴェツ達を見て恐れをなし、イジャスラフに使者を送って話し合いを始め、和平を求めた」

[1] から [3] までの例は『イバーチ一年代記』からのものである。この年代記には更に2つの例を見つけることができる。一方、[4] と [5] は、『ラヴレンチ一年代記』の後半部、いわゆる『スーズダリ年代記』（以後『スーズダリ年代記』と呼ぶ）からのもので、この資料にはこれらの例しか含まれていない。このように、*начати*の変化形と不定詞 *слати ся*による合成述語は出現頻度が高いとは決して言えないのであるが、特定の文脈で使用される定形表現であることは明らかである。例えば、[1] では公を他の都市から招聘するための交渉が行われ、[2] では公が自分を受け入れてもらうために都市に働きかけている。また、[3] ではポーランドに逃げた公妃に帰

国を促すための話し合いが行われている。そして、[4] と [5] は和平の交渉である。つまり、いずれの場合も、「何らかの目的を達成するために使者を送って交渉を始める」ことが表現されているのである。

ところで、本論文のテーマである「**начати + слати ся**」という結合には、以下のような特殊性が見られる。

- **начати** 以外にも不定詞と結びついて始発の意味を表す動詞があるのだが、**начати** は不定詞 **слати ся** との相性が良い。
- 始発の意味を表す動詞と **слати ся** が結合する例が見られない年代記がある。すなわち、『イバーチ一年代記』、『スーズダリ年代記』、『モスクワ年代記集成（15世紀末）』には、それぞれ10例、3例、7例出現する。ところが、『原初年代記』、『ノヴゴロド第一年代記』（古輯および新輯）、『ノヴゴロド第4年代記』、『ソフィア第1年代記』、『ブスクフ諸年代記』には1例も現れない。
- しかし、**слати ся** に対応する他動詞 **слати** も「使者を送って交渉する」という意味で使用されることがあり、その例は先の項目で名前を挙げた全て年代記に存在している。

「**начати + слати ся**」という合成述語について考えるためには、始発を意味する動詞（助動詞）とは何かということと、**слати ся** という語彙の問題を別個に検討する必要がある。

### 3. 「～し始める」という意味を表す助動詞

中世ロシア語において、不定詞を伴って動作の開始を表すことのできる動詞は、**начати** だけではない。同じ語根 *-čbn-* によって形成された **почати**, **учати**, 「成る」という語彙的意味を持つ **стati**, また語根 *-jbm-* によって作られ「取りかかる、着手する」という語彙的意味を持つ **яти ся**, **няти ся**, **прияти ся**, **въречи ся** などもやはり不定詞を伴って始発表現を担っている。

しかし、本論文で扱う年代記テキストでは、語彙の単純な出現頻度に関して言えば **начати** が圧倒的に高く、**почати** が二番目の位置を占めている。したがって、助動詞としての **начати** が持つ機能と意味について先ず検討する。

### 3.1 **начати** の機能と意味

Lomtev (1956: 62) には **начну** に代表される **начати** の現在形が不完了アスペクトの不定詞と結びついた時に表しうる意味として以下の三つが挙げられている。

#### (1) 動作の開始

Днесь и множество върныхъ Кыянъ и населници ихъ болше потщание и любовь ко архистратигу Господню имѣти начинаютъ. (『イバーチ一年代記』, 244v) 「この日、多くの信仰厚いキエフ市民と近郊の農民たちは主の司令官 (= 大天使ミカエル) に対する慈しみと愛情をさらに多く持とうとしている」

#### (2) 動作が開始して続けられる

Которая ли вървъ начнетъ платити дикую виру, колико лет заплатять ту виру. (『ルーシ法典』) 「共同体の罰金を払うところがあれば、その共同体の人々はその罰金を数年払うことになる (払い続ける)」

#### (3) 未来時制

Аще же убиятъ(ь) огнищанина в разбои, а убийца не изыщутъ(ь), то вирное платитъ, в неи же върнѣи голова начнетъ лежати. (『ルーシ法典』) 「もし富裕者が強盗に入られて殺害されたが、殺人者の捜索が行わなければ、殺害された者が眠ることになる共同体にたいして罰金が支払われる」

上記の(1)の意味と(2)の意味は、たしかに論理的には違っている。つまり、動作の開始のみを言って、その後の経過には言及しないのか、それともする

のかというのは、情報の伝達という観点から大きな違いがある。しかし、実質的にこの違いにはあまりこだわる必要がない。その理由は次節で述べる。

### 3.2 合成未来による始発表現と文献ジャンルとの関係

Lomtev (1956) で示された例の出典を見てみると、(1)始発の意味の例は『イパチ一年代記』から 2 例、『ノヴゴロド第 1 年代記』から 2 例取られている。ところが、(2)始発および継続と(3)未来時制の例はすべて『ルーシ法典』からのものである。実は、ソビエト時代の代表的な文法解説書である Lomtev (1956), Borkovskij-Kuznecov (1963) には共通した欠点が存在していると言われている。それは、中世東スラヴ語全体が「古ロシア語」(древнерусский язык) という概念でとらえられ、バルカン起源の教会スラヴ語と土着の東スラヴ語との構造的な違い、適用ジャンルの違いが完全に無視されていることに起因している。

Issatchenko (1980 : 386–387) で主張されているように、未来時制の助動詞が教会スラヴ語では **хочу** で、東スラヴ語で **начну** であるとすれば、教会スラヴ語の語法を基盤とする年代記の言語において、**начати** が未来時制を形成する助動詞として使用される可能性はほとんどないということになる。また、始発のみに言及するか、行為が開始された後に継続することまで言及しているのかという違いも、意味を持たなくなる。なぜなら、『ルーシ法典』は土着の東スラヴ語の要素が濃厚な文献の代表であって、年代記とはまったく違うジャンルに属しているからである。つまり、年代記言語において、始発の助動詞 **начати** は、動作の開始のみに言及することもあるし、その後の経過に言及することもありうる。

## 4. **слати ся** の特殊性

### 4.1 **слати** と **слати ся**

現代ロシア語でもそうであるように、他動詞に **ся** を付加して形成される

再帰動詞は、中世のロシア語においても「再帰」（動作が行為者に帰って来る）、「受動」、「自動詞化」、「相互」、「行為の執拗さ」など様々な意味やニュアンスを表すことで、もとの他動詞と差別化される。本論文で取り上げられた *слати ся* は、スレズネフスキイの『古ロシア語辞典』によれば、「使者を送って交渉する」という意味の他に、「証人として喚問する」というもう一つの意味を持っている。一方、他動詞 *слати* には「(人・物) を送る」、「知らせを送る」、「(人を) 差し向ける」という意味があることを同じ辞書で確認できる。つまり、他動詞は「何らかの目的で人や物、あるいは情報を送る」という意味を表しているのだが、再帰動詞は使用される場が他動詞よりも限定されていて、「何らかの目的を達成するために人を送って交渉する」あるいは「裁判の証人として喚問する」という意味しか表さない。さらにこの二つ目の意味は、辞書の例から判断する限り、司法関係の文書にしか現れない。従って、年代記に登場する *слати ся* は「交渉する」という意味以外では使用されないと考えてよいのかもしれない。

それでは、*слати ся* の「交渉する」という意味はどこから出ているのだろうか。その疑問に答える鍵は、他動詞 *слати* のアスペクト的意味にあるように思われる。

人や物を送るという行為は接頭辞 *по-* を伴う *послати/посылати* によって表すことができるのだが、*слати* はいくつかの点でこの完了・不完了ペアと違った意味を持っている。それらは、以下の通りである。

(1) 行為の反復性が強調されることが多い

一回だけの完結する行為は完了アスペクト形 *послати* によって表されるのだが、これに対応する不完了アスペクト形 *посылати* は行為の事実（«того же лѣта посылаша послы за море в Доньскую землю, и привезоша миръ докончавше» 「同じ年、海の向こうのドニの国 [= デンマーク] へ使者を送り、平和条約を結んで（使者たちを）帰国させた」『ノヴゴロド第1年代記・古輯』、1302年）を意味しており、反復が強調さ

れる時は **слати** が使用される。以下に示す『ノヴゴロド第1年代記・新輯』の一節がその典型的な例である。

Съи бо Блуд затворивъ ся съ Ярополкомъ, слаше къ Володимиру часто, веля ему приступити ко граду бранию, самъ мысля убить Ярополка. (980年) 「実は、このブルドはヤロポルクとともに籠城している時に、再三 ヴァラヂーミル に使者を送って、町に攻めてくるよう訴え、ヤロポルクを殺害しようとされていたのである」。<sup>1</sup>

(2) 他動詞ではあるのだが直接補語が明示されないことが多い

**послати** は基本的に直接補語が明示される動詞であり、それが省略されるのは派遣の目的が明確である場合に限られている («новгородьци же послали къ Гюргю по сынъ, и дасть имъ опять сынъ свои Все-володъ» 「ノヴゴロドの人々はユーリーに使者を送って息子を求めたが、彼 [= ユーリー] は再び彼ら [= ノヴゴロドの人々に] 自分の息子フセヴォロドを与えた」『ノヴゴロド第1年代記・古輯』, 1223年)。一方、**слати** については、『原初年代記』と『ノヴゴロド第1年代記』(古輯および新輯) では出現頻度自体が低く、補語が明示されるか否かについても顕著な差が見られない (それぞれの場合に関して 1 ~ 2 例見られるのみ)。しかし、この動詞の出現頻度が高い『イバーチ一年代記』では、人を暗黙の補語とすることが基本的な用法となっており、これを明示することはむしろ例外的である。この状況は、『モスクワ年代記集成』でも同じである。ただし、『ブスコフ諸年代記』では、対格補語を明示することが原則となっており、補語となることのできる語彙の種類も多い。つまり、年代記の系統による違いが見られるのである。これについては、次節で検討する。

これらのことから、**слати** は誰 (あるいは何) を送ったのかということよ

1 『原初年代記』にも類似した記述がある: «се бо Блуд затвори ся съ Ярополкомъ льстя ему. слаше к Володимеру часто...» (980年)。

りも、派遣の目的を伝達する方に意味の重点が置かれており、その派遣行為が複数回繰り返されることが前提となっていると考えられる。そして、この他動詞が再帰代名詞 *ся* を伴うことで、更に意味の特定化が進み、「交渉する」という意味が生じたのであろう。ちなみに、完了アスペクト形 *посласти* の再帰形 *послати ся* も何らかの目的を達成するために「書簡を送る」という特別な意味を持っている。

#### 4.2 年代記テキストの系統との関係

始発を意味する動詞と不定詞 *слати* と *слати ся* による合成述語の使用状況について、複数の年代記テキストで比較してみると、ある傾向が存在していることがわかる。下記の表「*слати/слати ся* と年代記テキストの関係」は、各年代記において不定詞 *слати* と *слати ся* が結びついている始発動詞の種類と出現頻度の一覧である。なお、表中の「×」は、不定詞に限らず *слати ся* のいかなる形も出現しないことを意味している。つまり、その年

表 *слати-слати ся* と年代記テキストとの関係

	СЛАТИ СЯ	СЛАТИ
原初年代記	○	начати (1)
イパーチ一年代記	начати (5), почати (4)	начати (17), почати (5)
スーズダリ年代記	начати (2), почати (1)	начати (2), почати (1)
モスクワ年代記集成	начати (6), почати (1)	начати (7), почати (2)
ノヴゴロド第1年代記・古輯	○	начати (1)
ノヴゴロド第1年代記・新輯	○	начати (1), няти ся (2)
ノヴゴロド第4年代記	×	начати (4), яти ся (2)
ソフィア第1年代記	×	начати (4)
プスコフ諸年代記	×	начати (5), хотѣти (5), въречи ся (1)

代記はそうした語彙を知らないということなのである。また、「○」は不定詞以外の形式での使用例であれば認められることを表している。

すでに、2節「本論部の目的」で述べたように、不定詞 *слати ся* が始発動詞と結びつく例は数が限られているだけでなく、どの年代記にもこの結合が現れるというわけではない。この結合の使用例が見られる三つの年代記のうち、『イバーチ一年代記』（後半部）と『モスクワ年代記集成』は「始発動詞 + *слати*」の結合も比較的多く見られる。そして、始発動詞 *почати* が現れるのは、これら二つの年代記と『スーズダリ年代記』のみである。*начати* と *почати* の比率に関する限り、『モスクワ』で *начати* の優位が最も顕著であり、『イバーチー』では、*слати ся* との結合については大差がない。そして、『スーズダリ』は、使用例が少ないために、始発動詞の使用比率について何も言つことができない。しかし、『モスクワ』における *слати ся* との結合例は、3つが『スーズダリ』のものと一致しており、そのうちの2つは『イバーチー』にも見られる。また、*слати* との結合例についても、5つが『イバーチー』と一致している。『モスクワ』は他の二つの年代記よりも成立時期が遅いことを考慮すると、記述の継承が行われたと考えてよい。そして、『モスクワ』独自の部分、すなわち『イバーチー』および『スーズダリ』が対象とした時代よりも後の時代の記述においては、始発動詞 *почати* が使用されなくなるが、*начати* と *слати ся* の結合は使われ続けている。つまり、定形表現として安定した地位を獲得したと言つてよい。

ただし、『原初年代記』と『イバーチ一年代記』の前半部、『ノヴゴロド第1年代記』（古輯および新輯）には、「*начати* + *слати ся*」が現れないことも事実である。また、『ノヴゴロド第4年代記』およびこれと多数の例を共有している『ソフィア第1年代記』、そして『プスコフ諸年代記』にはこの語彙そのものが使われていない。こうした状況から判断すると、この始発表現は古い時代の語法に属しておらず、やや時代が下ってから、特定の地域（おそらく南部）で使用されるようになり、やがてヴラヂーミル・スーズダリ、そしてモスクワへと継承されて定形表現となったのだが、北部地域では受け入れられなかったというおおよその経過を推定することができる。

## 引用文献

- Borkovskij-Kuznecov (1963) : В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*. Москва. 1963. (Reprint: Tokyo. 1978)
- Issatschenko (1980) : Aleksander Issatschenko, *Geschichte der russischen Sprache. 1. Band. Von den Anfängen bis zum Ende des 17. Jahrhunderts*. Heidelberg. 1980.
- Lomtev (1956) : Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксису русского языка*. Москва. 1956.
- 岡本 (2008) : 岡本崇男, 「人名 ГЮРГИ の表記をめぐって」。神戸外大論叢, 第59巻, 第3号。73-94。
- 佐藤 (2006) : 佐藤昭裕, 『中世スラブ語研究—『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語—』(ユーラシア古語文献研究叢書3)。

## 年代記および資料

1. 中條直樹・酒井純編, 『ノヴゴロド第一年代記』(シノド版) コンコーダンス (平成7. 9年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号07301080). 名古屋. 1998.
2. 中條直樹・酒井純編, 『ロシア原初年代記』コンコーダンス I, II (平成7. 9年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号07301080). 名古屋. 1998.
3. 中條直樹・酒井純編, 『ノヴゴロド第一年代記』(新輯本) コンコーダンス I, II (平成10. 12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号10410108). 名古屋. 2000.
4. 中條直樹・酒井純編, 『スーズダリ年代記』(ラヴレンチ一年代記) コンコーダンス (平成10. 12年度・文部省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号10410108). 名古屋. 2001.
5. 中條直樹・酒井純編, 『モスクワ年代記集成 (XV世紀末)』コンコーダンス I, III (平成14. 16年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号14310219). 名古屋. 2004.
6. 中條直樹・酒井純編, 『ノヴゴロド第4年代記』コンコーダンス (平成14. 16年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号14310219). 名古屋. 2005.
7. 中條直樹・酒井純編, 『イバーチ一年代記』コンコーダンス (平成17. 19年度・文部科学省科学研究費による研究成果, 課題番号17320048). 2006.
8. 中條直樹・酒井純編, 『ソフィア第1年代記』コンコーダンス (平成17. 19年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号17320048). 名古屋.

2007.

9. 中條直樹・酒井純編, 『プスコフ諸年代記』 コンコーダンス (平成17. 19年度・文部科学省科学研究費補助金による研究成果, 課題番号17320048). 名古屋. 2008.
10. *Полное собрание русских летописей. Том I. Ларентьевская летопись.* Москва. 1997.
11. *Полное собрание русских летописей. Том II. Ипатьевская летопись.* Москва. 1998.
12. *Полное собрание русских летописей. Том III. Новгородская первая летопись.* Москва. 2000.
13. *Полное собрание русских летописей. Том IV. Часть I. Новгородская четвертая летопись.* Москва. .
14. *Полное собрание русских летописей. Том V. Вып. II. Псковские летописи.* Москва. .
15. *Полное собрание русских летописей. Том VI Вып. I. Софийская первая летопись.* Москва. .
16. *Полное собрание русских летописей. Том XXV. Московский летописный свод конца XV века.* Москва. .